

---

# バカとテストとお嬢様

亜己那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストとお嬢様

### 【Nコード】

N8085Y

### 【作者名】

亜巳那

### 【あらすじ】

2年生になった明久達の前に現れたのは、軍隊育ちのお嬢様！？しかも、試召戦争なのに召喚獣を使わない！？

「どーいうことだよ　かくえん…ババア長！」

「なぜ、わざわざ言いかえたんさね…」

「それはきつと、明久が観<sup>バカ</sup>察処分者だからだ。ババア長」

「…もついいさね」

## オリキャラ設定

たかむら  
高村 彩乃

祖父は海軍幹部

父は、軍隊パイロット

母は、某テレビ局の会長の娘

と言う、根っからのお嬢様

父と祖父の影響により、運動神経がとってもいい

得意科目は、数学・英語・社会（公民）

で悪くても300点は取れる

ほかの科目は、ほぼ200点台

今回は、勉強が厳しい自分の家に反発してわざとFクラス入りした。

使えるコネは全て使う

外見は、銀魂のミツバだが、性格はおてんば

よしだ  
吉田 大河

彩乃の幼馴染であり許婚

運動神経は良いが、頭は悪い

彩乃の父から、彩乃を守る役目を頼まれている為、彩乃に近づく者

には体罰を与える

得意科目は、保健体育、社会（歴史）

で400点は取れる

その他は10点取ればよい方

外見は、SKET DANCEのスイッチだが全然冷静じゃない

試召戦争はあるが、召喚獣はでてきません

## オリキャラ設定（後書き）

記載テストと意気込み「あ」

「がんばりますので応援よろしくおねがいします」

お嬢様きたる！

## 文月学園

新設校にして、現在世間で最も話題を呼ぶ新技術“試験召喚システム”の試験採用校。

学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られる学園。

それ故、数多くのスポンサーがついている。

その中でも、文月学園への寄付がトップクラスなのが、海軍幹部えらいひと  
高村 たかむら 和幸 わこう

彼の寄付により、文月学園が成り立って入ると言っても過言ではない。

そのため、彼の孫娘 高村 彩乃と許婚である 吉田 大河も当然文月学園に入学した。

2人とも成績はトップクラス、2年の振り分け試験でも当然Aクラスだろうと皆が口をそろえて言った。

しかし今、そんな2人の目の前にあるのはAクラスのシステムですくではなく

かびた畳 足が折れた卓袱台 綿の入っていない座布団 チョークのない黒板

そのクラスは

文月学園 2 - F

通称、『バカの集まるFクラス』

### 振り分け試験当日

「ほんとにいいのか、彩乃」

「いいつて言ってるでしょ大河、絶対にFクラスに入ってるよ！」

「俺は別に平気なんだよ。ただ、お前は・・・」

「あのねえ。私はもうお嬢様生活なんて、う・ん・ざ・りなの！これからはFクラスで普通しょうみんの生活をするんだから」

「はぁ・・・」

黒髪の少年、吉田 大河は知っていた。こうなった彼女はもうとても無駄だと

「俺が、お父様に怒られるんだよ。それにFクラスにはお前を狙うやつが多そうだし」

そんな大河の思いを知ってか知らずか

亜麻色の髪の少女、高村 彩乃は

「いい大河。全部の問題にふざけた解答を書くのよ。例えば・・・

### 問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

『問題点……ガス代を払ってなかった事  
合金の例……未来合金（すごく強い）』

「みたいだね」

「ノリノリだった」

「あれ、今のどっかで見たことあるぞ！あれだよ、アニメぱくつたよね！？」

「……あつ、早くしないとテスト始まっちゃうよ！」

「スルーかよ」

そして、冒頭に戻る

「予想以上にひどいな」

「ええ。でも大丈夫よ」

「へえ、なんか策でもあるのかい？」

「高村家の力をすれば、小一時間で快適な空間に……」

「だめ！んなことしたらFクラスに来た意味ないだろ」

「そっか……」

そんな会話をしながら席に着き、かばんから荷物を取り出していると

「おい、彩乃」

「なに？大河？」

「お父様から伝言だ」

そう言つて、茶封筒を手渡す。

そこには、ご丁寧に『高村 彩乃様』と書かれている

そして内容は

「Fクラス入りおめでとう。そんな彩乃に私から進級祝いをあげよう。」

「文月学園の近くのマンションを一部屋買った  
」

「これから一年そこで過ごしなさい  
父より」

「う・・・そでしょ」



お嬢様きたる！（後書き）

駄文すいません！

明久たちは、次回出てきます。（予定です）

ストーリーは、私は原作をまだ二巻までしか読んでないので、オ리지ナルが多くなると思います。

感想、コメント、レビュー、評価全てお待ちしております！

お嬢様バカと出会う！

「う……………そでしょ」

「Fクラスに入ったの、相当怒ってるな」

「だね。あれ？まだ続きがある」

「部屋は一つだから2人の仲をこの一年でもっと深めちゃえ！彩乃！  
母より」

ビリッ　ビリビリビリ

「な　　んで」

「あ、彩乃？」

ビリビリビリ

「何で大河と一緒にすまなきゃなんないのー！！うっうっ」

「彩乃、泣くなよー！俺が泣かしたみたいじゃん！」

それでも、彩乃が泣き止む気配がない

「あゝ、もう。彩乃、一回保健室行こう。なっ？保健室で休もう

？おい、おい」

「……………zzz」

「寝てるし」

同棲もいいかもな

そんなことを思いながら、保健室へ向かう大河  
と入れ違いに、

「うっす、って誰もいねえよな」

赤い髪のおスゴリ「坂本　雄二がやってきた

30分後

「っん」

「お、起きた」

「いじぢいお〜?」

「保健室、お前は今までよだれたらしながら爆睡してた」

「誰かに言ったら、永眠」

「わあつてるよ！誰にもいわねえ。ほら、教室行くぞ」

「うん！」

5分後

「まだ？」

「あと、5階上だ」

さらに10分後

「足痛い」

「あと、3階上だ」

さらに15分後

「疲れた、ここ広い」

「文句言うな！ほら、あれがFクラス」

ダイリイ

シ  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

[illegible]

「私、行きたくない」

「奇遇だな、俺もだ」

ガッ  
シャ  
ー  
ン

「帰ろうか」

「そうだな」

ガラガラ

「あつ、吉田君に高村さん。今、皆さん自己紹介をしているので君たちも早くして下さい。」

「はい、福原先生」

ガラガラ

「皆さん、遅刻の二人が来たので自己紹介をしてもらいます」  
「では、まず吉田君から」

「はい、吉田 大河と言います。よろしくお願いします」  
「では、高村さん。」

「はい、高村 彩乃です。よろしくお願いします」  
「あーーーーーやのー！ー！！！」

「福原先生、一つ言い忘れたのでいいですか？」

「はい、どうぞ」

「チッ！」

「彩乃に近づく奴は、俺が体罰を与えるからな？」

「やってみろ！」

「福原先生、私からも一つ。」

「なんですか！？」

「私と大河は幼馴染で・・・」

シャッ（カッターが飛ぶ音）

シュッ（大河がよける音）

「チッ」

「許婚です」

『異端者吉田 大河をころせえ！』

ドタドタドタ

「彩乃に、近づくな！」

ガンッガンッガンッ（大河が、黒装束の奴らをへブンへ導いた音）

「彩乃に近づくなと言ったよね？」

「ああ、言ってたな。吉田。俺は近づかないが」

「お前は、坂本！ 奥さんは元気か？」

「何を言ってるんだ？」

「霧島がいつも言っていた。私は雄二の奥さんだって」

「翔子のやろお」

「あれ？雄二って霧島さんと知り合いなの？」

やって来たのは、吉井明久<sup>バカ</sup>

「今、バカ<sup>バカ</sup>って言ったよね？」

「うるさいよ、吉井君。」

「いや、うるさいとか言う以前に君も今バカって言わなかった？」

「うるさいよ、吉井君<sup>バカ</sup>。」

「あの、高村さん痛いんだけど・・・」

吉井の頭には彩乃の鉄拳が食い込んでいる。

彩乃が手を離すと、吉井は倒れた

「よっ吉井君!？」

「吉井!？」

「ふう、静かになったあ」

お嬢様バカと出会う！（後書き）

わかりづらくてすみません。

目線としては、大河っぽい感じですね。

次の次の回には、戦争のルール乗せたいな感想など、お待ちしています。

お嬢様は軍隊育ち（前書き）

完全大河目線です

## お嬢様は軍隊育ち

「ふう、静かになったあ」

「彩乃、俺言つたよね？」

俺の目の前では、もう原形を残さない吉井<sup>バカ</sup>とそれを看病するピンクでロングの髪をした巨乳とオレンジでポニーテールのペッタ  
ンコ

「何かあつたら俺がお前の代わりに罰を与えるって」

「私も、罰を与えたい！」

この、わがまま女！

「バカいうな！お前は、兵学校を首席で卒業したんだぞ！」

「大河は、次席でしょ！首席も次席も変わんないわ！」

「お前になんかあつたら、俺が困るんだよ！」

「お父様の事だったら、しばらくは私たちと会おうとしないわよ！」

「お父様のことじゃねえ！俺の問題だ！」

「夫婦喧嘩の最中悪いが、ひとつうーうーゴパア」

坂本が白目をむいて倒れるが知ったこっちゃない

「ふざけてんの？坂本！私は、こんなやつと夫婦じゃないわ！」

「彩乃、死人は何も聞こえないぞ」

「でも、許婚だろ？」

チツまだ生きてたか

「彩乃！霧島に電話！」

「OK！大河！」

「もしもし？霧島さん？私、彩乃。お宅の旦那がさつきから私にセクハラしてくるん」

「・・・雄二、浮気は許さない」

相変わらず早いな

「翔子、俺はお前のだんなになった覚えはないんだか？」



ブシュ

「ギヤアアアア、目がああああ」  
「ざまあみろ」

「あのお、霧島さんと坂本君はどういう関係なんですか」  
「ただの「夫婦」」

「違うからな、姫路。俺と翔子はただの「夫婦」」

「ふっ、夫婦・・・」

「だから違うって！」

うつとうしいやつだ

「霧島、坂本は今からデートに行きたいそうだ」

「吉田、テメエ！」

「・・・うれしい、雄二」

ガラガラガラ

これで、邪魔者はいなくなっ たな！

「うつっ、あれ？みんな何やってんの？」

ああ、そういえば吉井<sup>バカ</sup>もいたな

しばらくお待ちください

ひと段落して、俺、彩乃、坂本夫妻、吉井、姫路、ペッタンコは卓  
袱台を囲んでいた

「俺から一つ聞きたいんだが、吉田達が行っていた兵学校って言う  
のは？」

「「海軍兵学校だ／よ」」

「・・・それって、潰れたはず」

「確かに潰れた。俺たちは行ってたのは海軍の中の特殊部隊の方だ」

お嬢様は軍隊育ち（後書き）

今回は本と読みづらいです！すみません！

お嬢様は国家秘密！

「ちょっと待って、大河」

「なんだ？彩乃」

今、俺がいい感じに話し出すところじゃん！

「みんな、少し黙っててね」

何なんだよこいつは

「何で黙んなきゃなんないのよ！」

「少し黙っててね、ペッタンコ」

言った。こいつ面と向かって言ったぞ

「彩乃、今のはいくらなんでもペッタンコに失礼だぞ」

「あんたも言ってるから！それに私はペッタンコじゃない！私は、

島田 美波！」

「あつそ、とにかく黙ってて。島田さん？」

彩乃、殺る気満々だよ・・・

「よし、みんなが黙ったところで・・・」

「盗聴なんてやめて、出てきなさいよ」

こいつ、天井に向けてしゃべりかけたぞ！

ついに頭がやられたか！

ガラガラ

「・・・なぜ、わかった」

「ムツツリー二の盗聴がばれるとはもう」

入ってきたのは、ムツツリー二と美少女

「ムツツリー二はわかるが、隣の美少女は？」

「・・・木下 秀吉（高村の写真入荷したぞ）」

「木下さんか、よろしくな（3ダース買おう）」

「ワシは、男じゃ！それに、お主ら本音が漏れてるぞ！」

えっ、男なの？

「吉田、話がそれてるぞ」

「ああ、悪いな坂本」

「それで、海軍兵学校と言うのはなんなんだ」

「海軍の中の秘密組織だ。全国で腕のありそうなやつを拉致って、育成し、海軍のホープにする」

「……それは、犯罪」

「ああ、だが、誰も気づかない。引き込んだ奴は、死んだことにされるからな」

「それは、無理なのではないかのう」

「いや、国家プロジェクトだからな。戸籍から名前を消して、死体を作ることぐらい簡単さ」

「つてことは高村さんと吉田君は死んだことになってるんですか？」

「それに、なんで吉田と高村が引き込まれたのよ？」

「それは……」

流石にそれだけはいえない

「大河、ここからは私が言うわ」

「いいのか、彩乃」

「平気よ。別に、私はこの一年高村家とは関係ないんだから」

「ねえ、高村家って？」

ほんとに吉井はバカ<sup>バカ</sup>だな

「高村家って言うのは、私の実家よ。日本の軍事は私の家に支配されてるし、Ｔテレって知ってる？」

「ああ、あの視聴率日本一のテレビ局だろ？」

「そう、あそこも高村家がつくったテレビ局よ。この文月学園も高村家がスポンサーだし」

「すごいんですね、高村さんのおうち」

「全然すごくないわ、家の人はみんな変なのが多いし」

高村家がなければこいつは普通に暮らせたんだよな

「それで、その高村家がどうしたんだ？」

「その、高村家のトップであり私の祖父である高村 和幸<sup>わじう</sup>が海軍兵学校を作ったの」

「・・・それで、強制的に入ったのか？」

「そうよ、だから私と大河は死んだことになってないの」

さすがに、あれは言えないか

「そうだったんだ。ところで、どうして霧島さんがいるの？」

「・・・夫の世話は妻の役目」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

『異端者坂本をころせえ~~~~~』

黒装束め生きてたか！

「翔子つてめ何言つてんだ！」

「坂本、ここはまかせろ！黒装束は俺がやる！」

「すまない！吉田！」

「いいって事よ！」

そっいいながら、俺は拳銃を構える

「おい、明久！お前も逃げろ！」

「OK！雄二！」

『異端者坂本を逃がすな~~~~~！！！！！！』

ガラガラガラ

『いた！坂本だ！』

「おい！お前らの相手は俺だよ」

バンッバンッバンッ

「大河！私も混ぜてよ！」

「いいよ、好きなだけやれ！」

彩乃の銃から逃げたものはいないからな

「やったあ！それじゃ」

バババババンッ

バタッバタッバタッ

「バ~~~~イバイ」

お嬢様は国家秘密！（後書き）

ぐっだぐだです・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8085y/>

---

バカとテストとお嬢様

2011年11月27日11時51分発行